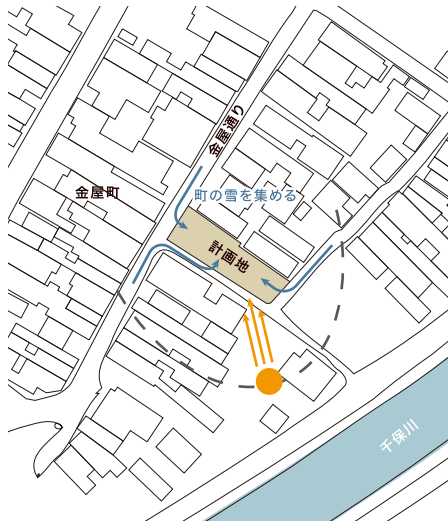


東京工業大学
森野 涼帆

【作品名】
雪仕舞いを澄ます
-「邪魔者」の雪を「資源」として利用する町屋住宅の提案-

1 敷地: 富山県金屋町 空き地

富山県高岡市にある金屋町は古くから鋳物業で栄え、土蔵を敷地奥に持つ町屋が並ぶ。

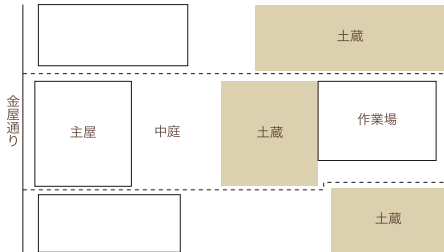


2 かつて存在していた雪国の知恵

富山県は豪雪地帯である一方で、温暖化により降雪量が減少した。それに伴いかつて存在していた「雪室」や「雪山」といった雪を賢く利用するための技術は失われた。しかし、近年では大雪による災害や町内での除雪の問題などが浮き彫りになっている。そこで、見えなかった土蔵を町へ開き、かつての知恵を再編することで、邪魔者として扱われる雪を資源として利用し、季節を楽しみながら地球への負担を減らす住宅を提案する。



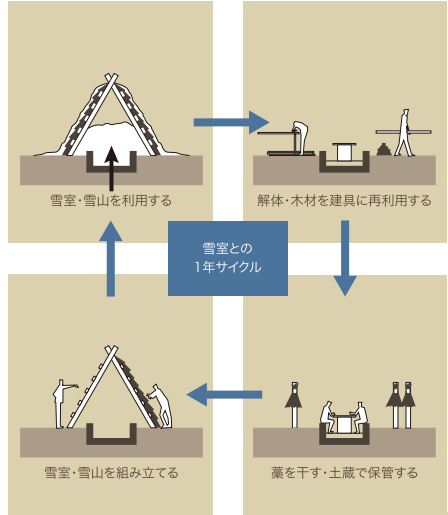
かつて存在していた雪国の知恵



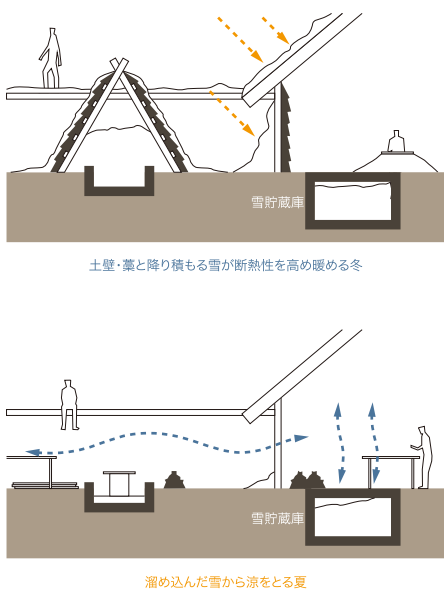
見えない土蔵が存在する町並み

3 地域の環境からつくる循環

冬季に建てる仮設の雪室と常設の土蔵を中心に資源の循環が生まれる。



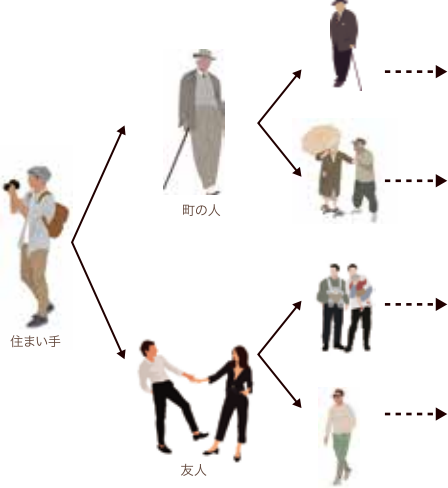
4 暖と涼を棲み分ける



溜め込んだ雪から涼をとる夏

5 個人から広がる交流

雪を集め、土蔵を開くことで、住まい手個人から友人、町の人へと交流が広がり、町の一部になっていく。



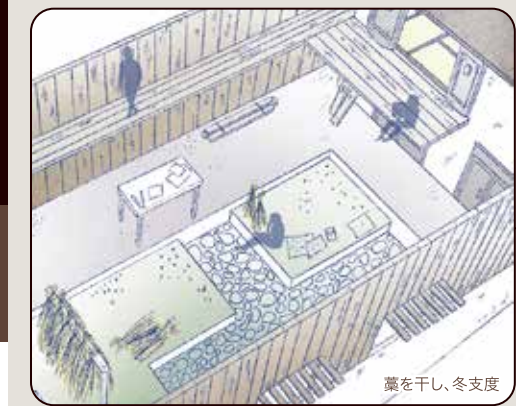
設計コンセプト

敷地となる富山県高岡市金屋町は、鋳物業で栄え、短冊状の敷地の奥には見えない土蔵が存在する。また、豪雪地帯である一方、温暖化とともに降雪量は減少し、かつて存在していた「雪室」や「雪山」といった雪を資源として利用するための技術は失われた。しかし、近年では大雪による災害や町内での除雪トラブルなど、雪による問題が浮き彫りになっている。技術を失った結果、雪は邪魔者となり、道路に投棄されたり、川へ捨てられることになった。そこで、見えなかった土蔵を町へ開き、かつての知恵を再編することで、邪魔者の雪を資源として利用し、季節を楽しみながら地球への負担を減らす住宅を提案する。雪を資源化するためにいくつかの操作を行う。まず、雪室を夏に解体、冬に建設することで1年サイクルを作る。藁や木材はその都度、建具

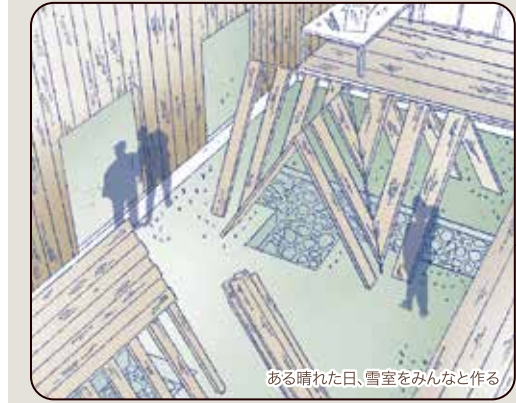
や家具、次の雪室に再利用される。次に1年を通して雪を残すために雪貯蔵庫を設ける。雪は食料の保管等に利用され、電気やガスなどに代わるエネルギーとなる。また雪貯蔵庫から主屋まで、冷気が吹き抜けるため、天然の冷房となる。そして、主な滞在場所となる書斎兼寝室を二つ用意することで、気温によって部屋を選択可能とした。主屋の方は南向きの部屋で光が入り、また暖かい空気が吹き抜けから上がってくる。一方で、暑苦しい夜には土蔵側の寝室を使う。土蔵は室内温度が一定に保たれるため、夏は涼しくなり快適に過ごすことができる住宅となった。

審査委員講評

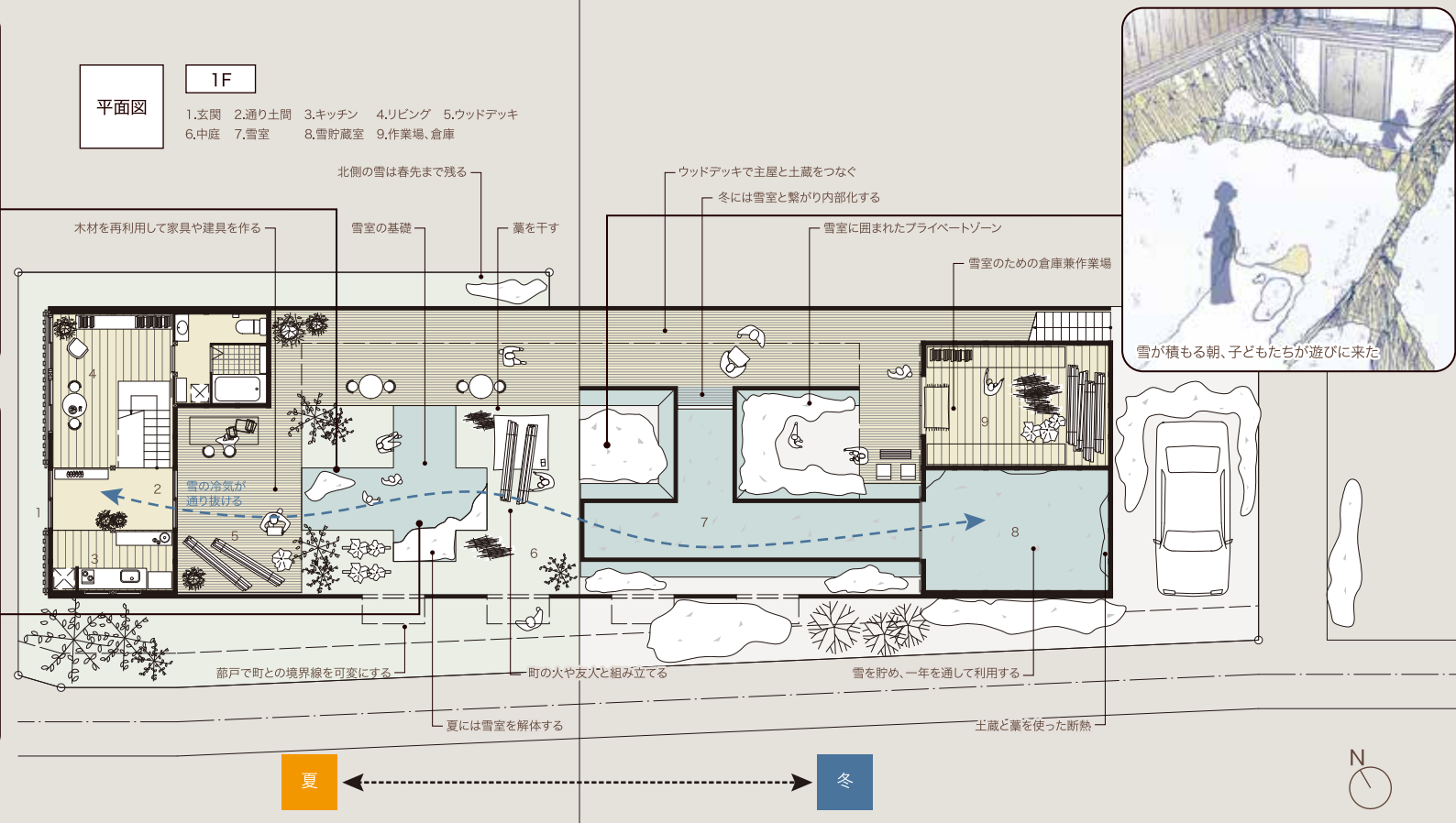
かつての雪国の知恵である雪室を土蔵のある建築に取り込んだ提案です。中庭の仮設雪室と土蔵を常設的に雪室として使うことで邪魔者として扱われる雪を冷蔵庫や夏場のクーラーとして利用する。有用な雪室のスケールや作業スペースの広さには多少の疑問は感じますが、建築に取り込むことで邪魔者を資源に変えようとする提案には好感を持ちます。



藁を干し、冬支度



ある晴れた日、雪室をみんなで作る

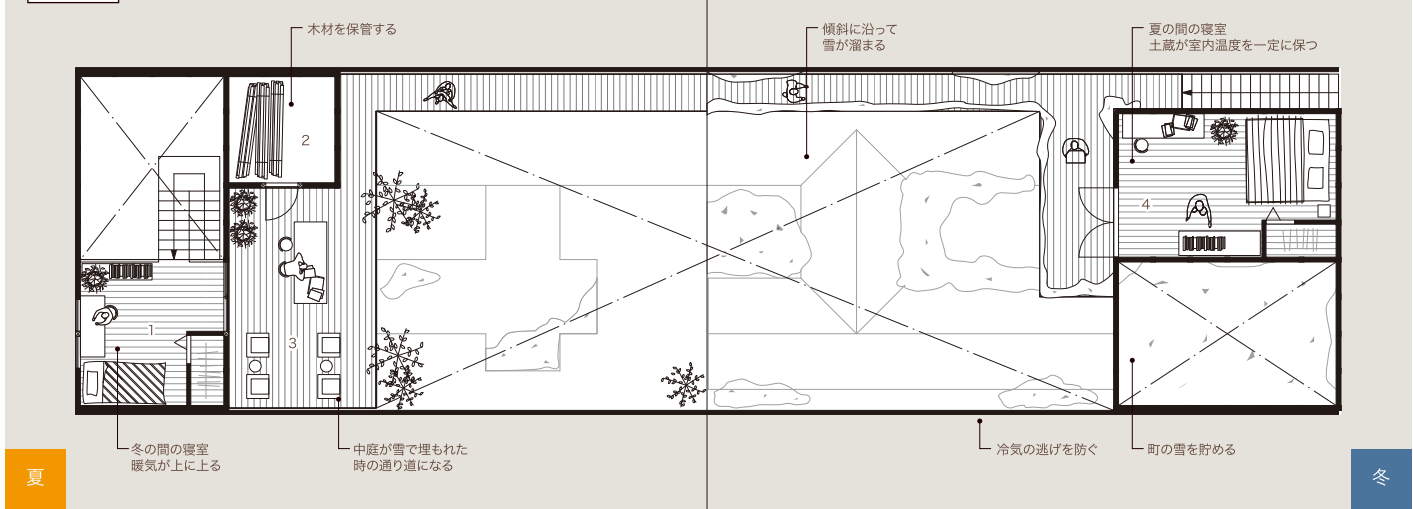


雪が積もる朝、子どもたちが遊びに来た

平面図

2F

1.寝室(冬) 2.倉庫 3.ウッドデッキ 4.寝室(夏)

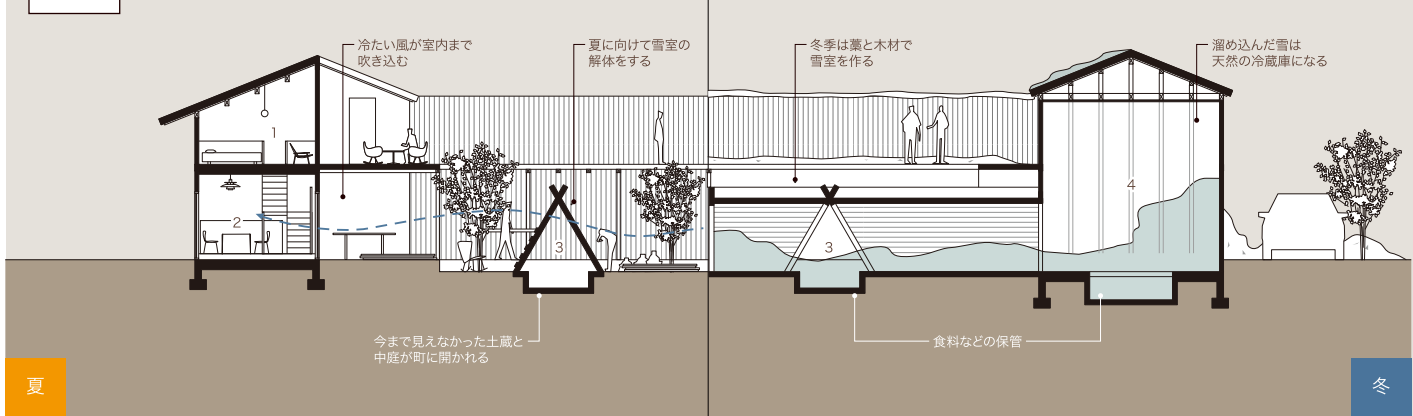


夏

冬

断面図

1.寝室(冬) 2.通り土間 3.小型雪貯蔵庫 4.土蔵



夏

冬